

花譜 卷之下

七月

蘭 此花上代には、其名いまだあらはれざりにや。
もろこしの古書に、蘭といへるは、ふぢばかまの事
也。古歌に、らにとよめるも、ふぢはかまなり。此花
にはあらず。此花は後代にぞ、人のもてあそびと
はなれる。其かたちすぐれざれども、其香衆芳にこ
え、其葉も又雅なり。故に世こぞりて是を盆中に
うへて、席上の清玩とす。凡四種あり、大蘭、中
蘭、小蘭 青莖ぐきなり。中蘭は常に世におほき蘭なり。
大蘭は其葉しやがの大きさのごとし。春花さくゆへ
春蘭ともいふ。此蘭まれなり。小蘭は其葉小なり。
青くきに二種あり。一種は葉立のぼりて直すぐなり。
其香はなはだよし。一種は葉立のぼらず。横にたは
めり。其香次なり。然れども他の蘭よりは香よし。
四種ともに皆寒暑かんじよをおそる。はげしき風寒、雪霜

つよきにあたらしむべからず。樹下はあじろ。陰地をこのみ水を好む。又濕しつをきらふ。はなはだ鐵をいむ。葉をきるに鐵刀を用べからず。寒風雪霜にあたれば、たちまち痛いたむ。暑月には、すぐしき所にをく。しばしば水を澆そぐべし。秋も三日に一度そぐべし。されども水おほければ、濕とどこほりて根くさる。盆にうへて、十月はじめより、土藏のうち、あるひは、あたろかなる屋下に置べし。其上を桶あるひは箱を以て、氣の出る所をあけておほふべし。或こもにてあつく覆おほふもよし。しからざれば、いたみかるゝ。冬の間もときぐ水みづを澆そぐべし。二月中旬あたろかになりたる時、おほひをさりて取出すべし。二月より九月の末まで、常に日かげに置、時々日にあて雨にあつべし。土かはくはあじろ。うるほひすぐるもあじろ。又平地を少し高くして、濕なき所にうふるもよし。○蘭をうふるに、やはらかなる肥土を用ひ、又黒土にあか土をませ、こ

まかにくだきてうふべし。盆の底に穴をひろくう
がち、かはらのわれ、或小石を穴のうがちたる所
に置、其上にあらき砂を入べし。水もれやすし。
又其上に肥土を入べし。ねば土あし。盆の底の
穴せばければ、濕とぶこほりてくさる。盆にうふ
るに多くうふべからず。盆中ひろくして、根のつま
らざるやうにすべし。凡蘭は人の垢汁あかしるをこのむぎやう。行
水の汁そいぐなど澆そいぐべし。盆にうへたるには、毎朝ひん鬢の
水を灌そいぐべし。魚の洗汁をそぐべし。日をへたる
はあし。ことにうなぎの洗汁よし。時々かけて
よし。一度に多く掛かくるはあし。少づかくべし。
正月より二月頃は、一切こやしを用べからず。子
出かぬるもの也。或曰、一切こやしをいむ。魚の
汁をもかけざるがよし。根に蚯蚓みづぢつけばあし。
○或曰、蘭は若うつしうへば四月によろし。根を
ほるに折べからず。そこなふべからず。竹のへら
にて、根をそこなはざるやうに、しづかにほるべ

し。鐵器^{てつぎ}をいむ。根をまげてうふべからず。すぐなるはすぐにし、横なるは横にし、其根の性に從^{したが}ふべし。たはむべからず。凡蘭には糞小便をはなはだいむ。魚汁もあしう。但糞に和したる肥土の、二三年も久しくなるを以て、土をかへてよし。濕をいみ水を好む。葉長さゆへ、根の精氣葉さきまでとどかずして、葉さき枯るには、ときぐく水を葉に澆べし。

東蒲塞牽牛花^{かんぽうせんぎゅうがは} 子をまきて生ず。日あてをこのむ。

蔓^{つる}はなはださかへ長ず。盆栽箱にうへて、ませを作り、かごのごとくにして蔓^{つる}をはくしむ。花ひらきてはなはだ愛すべし。うへたる盆を床のほとりにをくべし。七月中の後花さく。此草の種近世異國^{いこく}よりきたる。もろこしの書にていまだみず。

桔梗 二月に根をうふ。紫白二色あり。みごりにて紫色なるものよし。八重もあり。古歌に、きちかうとかくし題によめり。一重草ともよめり。根は

藥とす。一株かよに多くうへたるがよし。

鶏頭花けいとうげ 葉白く、莖くきうすあかきは花よし。是を倭俗、

錦鶏頭にしきといふ。又莖の濃こくあかきは、花よからず。

菜蔬さいそとすべし。花黄なるあり、黄紅まじれるあり。

子みを二月にまく。或去年の子をちて自生す。四月

に苗生ず。子みかたき故、他草より苗生ずる事遅し。

葉わかきときゆひさもの茹ゆとなして食す。莧ひゅうに似てうまし。

性は莧にまされり。かたはらに出る小枝を摘つみさり

て、こずゑの一花を残すべし。秋後花漸大なり。

冬にいたるまで久に耐たふる物なり。

槿花むくげ 千葉あり、單葉ひとはあり。共に紅白あり。さして

よく活つく。和歌に朝顔とよめるはこれなり。萬葉

集の歌に、朝がほは朝露をびて咲といへど夕かげ

にこそ咲まさりけれ。とあるを以て、あさがほの

むくげなる事を知るべし。今世俗に、朝がほといへ

るは、牽牛子けんとうし也。古今集にも、けにごしとよのり。

丈菊ひふがふ 花史曰、其くき一丈あまりありて、かたく

あらし。其生ずる事すぐ也。頭に一大花をひらく。
單ひとへにして色黄也。尤下品也。其花日にむかふ故、倭

俗、向日葵かうじつと云。
ひよが

龍膽草りんだう 和名、くたにとも云。山野に多し。二月に苗
を生ず。七月に瑠璃るりいろの花ひらく。愛じつべし。
赤土によろし。魚のあらひ汁を根にそぐべし。

蘋ひぎ桐とうぎり 本草に喬木けうもくの類海桐の下にあり。夏秋の間あ

かき花をひらきて、久しくをとろへず。近年唐より
きたる。其葉桐に似たる故、たうぎりとも云。盆
或地にうふ。うへてよく有付て後、まはりをとを
くほり、雨ふらんとする前に糞をおくべし。近く
おけばかるゝ。甚風寒をおそる。冬園地にうへお
けば必枯る。或曰、冬春の間、雨風のあたらざる
屋かげに、よこにそばだて、物によせかけたるごと
く、土にふかく埋み、しんぼくの末少出るほごな
るべじ。春暖あたかになりたるとき、とり出しうふべし。
何十本にても、一所にかさね埋てもよし。又地に

其まゝをきて、冬はおほひを厚^{あつく}し、根に馬糞をあつくおほふべし。或云、冬は屋下の暖なる所にうつし、やしなふもよし。冬も時々水をそゝがざればかる。冬はくきを切たるもよし。來春生長す。植て久しければ日にいたます。西北風あたらざる暖なる所にうふべし。馬糞を根につめば、寒にいたまずして且さかふ。又ごろ水をかけてよし。根より子多生ず。

紫菀^{しおん} おにのしこ草と云。古今集には、しおにとよめり。花むらさきなり。

睡蓮^{すいれん} 其葉苳^{あさぐさ}のごとくにして大なり。其花蓮に似て

白くして八重也。夏に至りて花ひらく時、晝は水面に出で、夜は水中に入ると、西陽雜俎、北戸錄、本草綱目等に記せり。夜より朝までは水中にあり。晝より水上に浮む。

白粉花^{おしろいはな} 花黄赤二種あり。正月二月にたねをうふ。甚茂盛す。ふる根も又生ず。泥土によろし。七月に

花開く。秋ふくるまで花あり。晝は、しばみ曉に、ひらく。子は胡椒のごとし。うちに白き粉あり。黒泥をそぐげば盛長し、花多し。おほ

午時紅 瓶史に出たり。篤信曰、倭俗に、午時花といふ。舊根よりは不_レ生。毎春種子たねを下す。日中に花ひらく、故名づく。

八月

鹿鳴草^{はぎ} 八月に花をひらく。萬葉集に、榛又芽子花共かけり。俗に、萩の字をかく。もろこしの詩にみえずといへ共、和歌には多く詠せり。或曰、花史に、天竺花と云は花なり。はぎに數品あり。木萩とて古枝より葉生じ。花さくあり。冬は葉をちて春又もとの莖より生ず。又別に一種春根より新しく莖を生ずるあり。此事袖中抄にもみえたり。庭にうへてまがきとすべし。一種宮城野はぎといふあり。其花尤うるはし。其莖冬かれて春新に根より

生ず。甚長茂す。しげく植べからず。年々根をわ
かち植べし。しげりやすし。或又一根より一莖を
そだつるもよし。甚大にしげる。又一種、花紅にし
て、夏至の頃花をひらく。又白萩あり。

木芙蓉花 ふよう 紅なる千葉あり。甚よし。又白きひとへ
あり、千葉あり。紅にをどれり。十一月嫩枝 わか をき
る事一尺計、陽に向へる地にさすべし。いきずと
いふ事なし。翌年必花さく。正月さすもよし。

木犀花 其花の香、垣 かき をへだてゝ、はなはだをくか
ほる。桂花是なり。高き事六尺にみたざれば、花
さかず。猪の糞、蠶の糞を用れば花さかり也。と遵
生八牋にみえたり。日かげによろしからず。

女郎花 おみなへし 七月に花をひらく。本朝源順詩、女郎花を
詠ず。朗詠にみえたり。和歌には多く詠ず。もろこ
しには賞せず。本草に敗醬あり。女郎花なるべし。
敗醬は白花のよしみえ侍る。されども花の色は所
によりてかはる事あり。

獨頭蘭^{はくろう}

山に生ず。花葉ともに蘭に似て、すこし香あり。山人根を用てあぶり、くだきて、のりのごとくにして、手足の輝^{あかり}をふさぐ。よく治す。此物説郛の内蘭譜に出たり。

附子^{とりかよ}

其花紺色にして、其葉蘭に似たり。人糞を以てやらなへば、其根大にして花さかななり。毒草なり。

九月

菊 月令爾雅楚辭にのせて、上代より名を得たり。屈

原、淵明など、正人達士の賞せし花なり。群花にをくれて、晩秋にひとりひらきて、百花と春をあらそはざるにや。花の隱逸なるもの也。と周子も云へり。色香かたちともに、すぐれてめでたきもの也。誠に花の上品とすべし。詩歌に多く詠じ、からやまと、いにしへ今、人のあまねく愛するもむべなり。月令^{きく}鞠有^{きく}黄花^{きく}といへれば、黄なるを正色

とすべし。後世には其品やうやくおほし。宋の劉蒙
が菊譜に三十五種あり。其内倭菊あり。又御愛、鵝
毛、楊妃などあり。又遵生八牋に菊の名多く載た
り。其内醉楊妃、紅牡丹などあり。是今日本にある
所なるか。宋范石湖が菊譜に七十一種をのせたり。
今本邦にあるところ二百餘種なり。○菊花を食す
れば養生の上薬とす。身をかるくし、年をのぶるよ
う、本草にしるせり。風俗通には、南陽縣の人菊
水の下流をのみて、皆いのち百二三十歳、百餘歳、
七八十歳をたもつ、菊の花、身をかるくして、氣を
まし、人を堅強ならしむる故也。とあるせり。陶淵
明が詩にも、菊爲^レ制^ニ頽齡^一といへり。よはいをの
ぶる意なり。薬として服するには、黄にして味甘
きを用ゆべし。○菊には六月前に糞^{こけ}を置べから
ず。六月に一度根まはりをはりて、雨の前に糞を
置べし。又七月に一度雨の前に糞をおくべし。雨
のまへにおけば、根によくしみとをる。糞を置いて日

にあたれば、根かたまりていたむ。其莖長くとも其心を折べからず。わき枝は長じても、しんとするにあし。又長きをさらひて莖をおるもあり。○からの菊をうふる法、農政全書曰、凡菊をうふるに六事あり。一には**貯^{タクハフ}土^ツ** 肥土を忍らび、冬至の後糞をかけ、凍^{こほり}て乾くをまちて、其土の浮^{うき}鬆^{やほら}なるものをとりて、塲^{ちやう}地におき、再糞をかけ、かはきて後土中にをさめおき、春分の後出して日にさらし、數度かへし、其蟲蟻と草の梗^{くき}を去る。若不^レ去ば蒸^{むし}てくさり、紅蟲、蠶^{さぎ}蠶^{むし}、蚯蚓^{みづ}など生じて、菊の害をなすなり。土をきよくしておさめおきて、菊をうへて後、此土を用ゆべし。菊をうへて三日以上雨にあひて、土かたく根あらはれば、此土を以て根をおほふべし。かくのごとくすれば、早^{ひでり}をふせぎ、雨の澤^{うるは}をおさめて、其根くさらず。二には**留^ル種** 冬のはじめに、菊のくきをさり、其幹^{から}を五六寸留めおき、臘^{シベス}月にこき糞をそぐ事數度、か

くのごとくすればあたかり煖にして氷こほらず。以て菊の花を
壯さかんにすべし。以て寒をふせぎ、以て、潤澤にして、
枯燥こさうにいたらず。三には分ツナエラ秧ナエラ 春分の後、菊秧なへを
分るとき、根に髭ひげ多くして、土中の莖黄白色なる
を用ゆ。ひげ少して白きを不可用。新にすきた
る鬆地やばらにうふべし。はなはだこゆる太肥はなはだこゆる によるしからず。天氣
くもりたる日、菊を分うふべし。晴天の日わかつべ
からず。枯乾かはきて活つきがたし。うふる地は其宿土よるを
盡ことごと去べし。しからざれば蟲の害あり。うへて後
こもを以て日おほひにすべし。日にあつる事なか
れ。毎朝水をかけ晩にも澆かくべし。くもりたる日は
水を澆べからず。苗のはへ出たるとき、日おほ
ひをさるべし。先半糞の水、又肥水を用ひて澆之。
葉の上に糞を澆べからず。河と井との水をまじゆ
べからず。井水にても河水にても、純水じゆんを用べし。
四ニは登レス盆ニ 立夏の時分、苗五六寸許なるとき、
盆に上すべし。其前數日水を澆べからず。則苗堅老

にして在^テ盆^ニ可^ニ以^{タフ}耐^ニ日^ニ。根土を必廣大にほるべし。臘前こしらへたる糞土を^{つちかふ}壠^ニべし。陰晴をみて水をそぐに増減すべし。葉生じて後肥水を澆べし。久雨には臘土を以てうるほすべし。うへやう淺ければ日にいたむ。深ければ水にいたむ。凡菊の根上にうきやすし。故常に土をおほふべし。五には**理緝**菊一尺許なるとき、長せしめんとおもはば、其旁枝^{わき}をさるべし。短からしめんとおもはば、其正枝^{しん}をさるべし。花の枝は其大小を見て存^{のこ}すべし。大者は四五寸^{すん}、次は七八。其次は十餘、小者は二十餘蕊、甘菊、寒菊は獨梗^{ひともと}にして千花あり。去べからず。六には**護養**菊やうく長ずるとき、竹を立てゆひ付、風に搖^{うたか}さしむべからず。菊の傍^{かたはら}に蟻多くば、鼈^{どうがめ}甲^めをそばにおけば、蟻必其鼈甲に集るを他所にうつすべし。夏至の前後^{きくすい}菊虎^{きくすい}とて、黑色なる蟲^{はれあた}晴^{たう}煖^かなるとき、とび出て苗をそこなふ。出るこきをまちて除^{のぞ}くべし。菊虎^{やぶひ}の傷^{やぶひ}し所、

手にて少つみ折て、其毒をさるべし。秋後に又蟲生ず。多くしげりやすき雜菊を、まはりに栽^{うゑ}べし。

凡菊は香あるゆへに、蟻上て糞をして蟲を生ず。

蟲長じ蟻食へば、長せず。其蟲白虱^{しらみ}のごとし。し

ゆる帚^{はき}を作りてとるべし。蟻糞のあとに、青色に

て菊の葉の色のごくなる蟲あり。葉底上に生ず。

半月は上にあり。半月は下にあり。凡草木みなしかり。其うるほひ以三晦朔一

爲三升降。故耳此物理也。○遵生八牋曰、菊をわかつに三月中よし。

かはきうるほひ。よき頃なる土にうへて、根を堅

むべし。雨中に植べからず。濕泥根につけば、あし

し。はやくわかつはよろしからず。○又曰、うねを

たかくして濕をさけ、溝を廣くして、水をながす

べし。毎年ふる土を替へし。鷄鷲の糞を用ひ、土

に和してうふべし。つばみ豆の大きさになるとき、

は糞水を二度澆べし。花ひらく時一度澆べし。か

くのごとくすれば、花大にして厚く、久きにたふ。

○葉の間に小枝の出るを、はやくつみさるべし。菊

の蟲いろく多し。心を用てとりさるべし。五月の間、螢のごとくにして、羽ある蟲を菊牛きくすいと名づく。ことに苗を害すがい。此蟲己辰のとき出。其時とるべし。○菊漸長するとき、この竹をかたはらにたて、しゆるのいさを以て、ゆるやかにゆひて、直なをからしむべし。しからざれば風雨にかたぶき、花長じてかぶむ。○前年より、かねてこまかなる肥土をこしらへおき、梅雨つゆの後根に土かふべし。長雨には、其根たづねやすきがゆへ也。かやうにすれば、新根生じやすし。○倭俗の曰、菊はひきくして、眼下に見下すを好とし、高を不レ好とす。ゆへに七月以前には、糞を不レ用。若長じやすくば、梢を折て、旁枝わきおほく生ずるを其まゝおき、七月に至て、旁枝の中にて大なるを止め、其餘をつみさり、七月の節に入て、根の廻りをほりまはして糞を置べし。五日に一度は糞水を澆そいぐべし。○又曰、菊をうふるに、去年のふる地をいむ。若舊地にうへば、上

土三寸をさりて、他土をおくべし。菊根は土の皮にはびこりて、ふかく入らず。故に土をふかくほり、やはらかにする事惡し。ふかくほりて土和かなれば、水をたもたずして枯^{かれ}やすし。又糞氣も底^{そこ}へもれてあし。只地上より三寸の間を和かにして、うふべし。凡花草は皆濕をさらふ。ことさら菊牡丹甚し。雨しげき夏は、菊かれやすし。○苑至能が曰、其苗尺ばかりの時、其顛^{いたゞき}をつみ去、數日にして兩枝わかれ出。又つみさるごとに出来る。秋に至て、一本より出る枝はなはだおほし。人力つとめ、土又膏沃^{かうよく}、花亦爲^ニ之^カ屢變ず。○古今醫統曰、菊をうふるに六要あり。一には日あてにうふ。二には其畦^{くね}をたかくして、其溝^{みぞ}をひろくし、年々其地をかへ新土をくはへ、舊土を去べし。三には小竹をたて、其苗をゆるやかにゆひ立べし。四には乾土を以て培べし、久雨に根くされず。五にはわき枝を去て、正幹^{しん}をそだつべし。六には朝清水を其根

にそゝぎて、後糞を用てそゝぎ培べし。○倭俗、菊を種る一法、冬月或正月に、あず沙と圃はたけの肥土、等分にまぜてひろげ、糞を上にかけてほし、しばくかへして久しく乾す。小石草根などをさり、雨ふれば一所に集めおほひをすべし。三月菊苗を分ちうへんとする地の舊土を四五寸除て、正月より乾し置たる新土を、舊土より少たかく置て、苗をうへ、日おほひをし、苗若はやく長せば、一度つみ折、猶長じすぎれば、ふたゝびつみ折、若苗はなはだかじけば、米泔しろみづと小便とうぶんと等分とうぶんにまぜたる水をかくる。かじけざるには不_レ用_レ之。秋の節に入て米泔しろみづ、小便とうぶん、等分の水を二三日ごとに、しばく_レ澆かけ、他の草を不_レ用。つぼみ付て後は、小便を減じ、米泔しろみづ二分小便一分合はす。しからずば、根より生ずる子苗痛いたむ。花のひらくときまで、右の水を用れば、花の勢盛なり。凡菊の根に人糞を直におく事あむ。根くさる。まはりをはりて遠くおくべし。苗は三月中

の頃うふべし。早きはあじろ。梅雨つゆのうちに糞を一度、七月中元はんの頃又糞一度、凡兩度の外糞をおくべからず。七月以後糞を置ば蟲生ず。○又曰、菊をうふるには、黒土よし。田土あづ土をまじへ、よき日にほし、こまかに打くださ、末してよし。かねてより人糞を小便にて和し、うすくして別の土にかけ、其上に、ふるむしろをおほひ、くさらかして後日にほし、こまかにくださ、梅雨の後少しづつ菊の根におくべし。五月より八九月の頃まで、二三度右の土をおくべし。おほきはあじろ。五月より前に、こえをかけばいたむ。○或曰、梅雨のうち一度少糞を置、四五月は不可用功。七月初より枝をさり、まがきをゆひ、二三度糞をしくべし。凡菊は日をおそる。○一説曰、此説、おほりに至まで好説也。尤信べき也。春分に苗をわかつ。凡世俗の説に、三月中に遅く分つをよしとす。されども遅ければ葉ひろがり、莖大くきにして、日つよく成てかれやすし。有付事おそし。

故に春分に早くわかちうふべし。生活しやすし。又生長し過て、長さたかくなる菊あり。それはおそくわかちうふべし。一偏に論ずべからず。或かぶともに引て、陰地におけば遅く長ず。凡菊苗をうふるに、先田土を丸じて大指の大にして、それに菊の苗の本をさして、其丸めたる土共にうふべし。いきやすし。菊をうふるに、世俗は糞土を用る故に、苗いたみ枯やすく、發生遅し。たとひ臘月より糞を布て、ほしたる土にても、こゑ土はあしう。あづ土尤よし。次には黒土に砂を半ませたる和糞を用ひうふべし。うふる時土を堅めてうふべし。つきやすし。ありつきて後、雨後土かたく成ば、根のまはりの糞をやはらげてよし。うふる時は、土のやはらかなるをさらひ、すでに有付ては、地のかたきをさらふ。糞を下すに、苗よく有付て、三月の末、まはりを少ほりて、はじめて糞をおくべし。梅雨の前に凡三度おくべし。梅雨以後糞をおかず。

是世俗の説にかはれり。梅雨の前、葉の間に小さき芽生せば、本莖をきりさるべし。たかきをさらふ故に、わき枝をそだつ、俄に長せざるやうにとなり。臘月より肥土にたびく糞をかけて、ほしたる作り土をたくはへ置、六月下旬よりたびくおくべし。多は置べからず。根蟲と節蟲とをさるべし。節蟲のさりやう、蟲ある所の莖を半けづりさりて、竹をわり少にして、莖のうちにある蟲を殺すべし。

削^{けつり}たる所は、やがている、しう出来るもの也。菊は精氣つよき物なる故、半削りてもいたまず。七月の節より脇枝^{おほ}多く出来るをさるべし。但枝をそだつるは、根の方にちかき所より、はやくそだつべし。梢の方にて 枝多く付ては、莖の精氣よはくして花よからず。精氣盛なる菊は、五枝まではよし。八月節よりはじめてつばみを生ず。梢に小つばみを生ずる事あり。其葉菊の葉に替りて、桃の葉のごとし。其つばみは後に必花小にしてあしう。摘^{つま}

さりて脇ばへを長ずべし。八月初根まほりをほりて、やはらかなる糞を一度おくべし。或小便をそそぐもあり。糞のよきにはしかず。此外糞をおくべからず。是異説といへども、久しくころみたる説なり。信ずべし。

秋牡丹たうまぐ 遵生八牋に、葉牡丹に似たり。花は淺紫黃心なり。苗は舊根より生ずとかけり。花は菊に似てひとへなり、或かうらい菊とも云。九月の節の後花さく。園史にものせたり。

鬱金うこん 寒氣をおそる。寒月は根をほり出し、かまごの前の土をほりて、うづみ春あたふかなる時、取出しうふべし。冬月其まゝ外にうへては、かならず枯る。

通和つは 欸冬ふきの葉に似てあつく、光あり。秋黃花を開く。單葉ひとへの菊に似たり。是又園末にうへて、佳趣をたすくべし。○莖をきりて皮をさり、茹ゆとなして食す。露よきのごとし。毒なし。河豚魚ふぐ及生堅魚かつをの

毒、一切のごくをけす。すりくだき、汁をとりてのむ。甚しるしあり。是を欸冬と云はあやまれり。欸冬はふきなり。李時珍、食物本草を考みるべし。

十月

寒菊 葉も花も常の菊より細なり。十月に黃花を開きて、臘月に至る。花なきときひらく故、花賞するに堪たり。京都は寒き故、其葉もみちして、葉もみるに堪たり。菊と同類なれども、花の時節かはる故に、別に記す。馬糞小便を澆べし。枝をはぶかず、其まゝおくべし。花の多おほきがよし。はやく小竹をたてゝゆひ立べし。

枇杷 十月節の後花ひらく。香よし。陽地にうへて、根まはりに入糞をおくべし。土地のきらひなし。蝸牛枝かたつぶりにつかば、とり去べし。其實は四月諸菓に先達て熟す。

茶梅花 さかんくわ

花は茶に似て白く、香ばし。ひとへなり。葉は山茶花 つばき に似て小し。其たかき事一二丈にいたる。

山木也。赤土黒土によろし。

海紅花 くれないのさかんくわ

茶梅花の紅なる也。淡き濃き二色あり。

香あり。高さ一二尺の時より花さく。木大ならず。又長じがたし。十月よりひらきて二月に至る。花の色うるはしく盛ひさし。冬の間、花すくなきときひらきて、いと愛賞すべし。是又赤土黒土によろし。正月五月赤土に枝をさすべし。

十一月

水仙 本草曰、こえ地にうふれば、花さかん也。やせ地には花なし。五月の初根をほり出し、わらんべの小便に一夜ひたし、ほして、あたふかなる所にかけおくべし。又其まゝ置てもよし。ひきくして濕ある地によろし。○篤信曰、居家必用にも、ほりて小便に一夜ひたすとあり。畦 うね を作て大小各別に

うふべし。肥土にうへ、其上に糞土をおほふべし。
小者^{ナル}に花不開。養事數年、其根大にして花ひら
く。千葉あり金盞銀臺^{さん}あり。金盞銀臺よし。諸書
皆九月初にうふとあり。但陽地にうふれば、白露の
後に生ず。故に八月の節の初に植べし。糞は人糞
馬糞小便よろし。今人多くは七月にうふ。倭俗の
うへやう一説あり。五月の頃ほり出し、土をふか
くほり、馬糞を多くうづみ、其上にふるむしろを
敷、其上に肥土を置て、水仙根をうふべし。しげ
きによろしからず。夏の間も其まうへおきて害
なし。うへ付にすべしといへり。根より側子を生
ずるをば、分ちうふべし。陽地の南にむかへる所
に種^まれば、花をひらく事はやし。すゝがや、やけ土、
かまごの土などを以ておほへば、十月にはやく花
さく。中華の書には、濕地にうふとみえたり。然ど
も濕なき所もよし。ほり出さず其まうへにつけ
にして、隔年にほり出し、分ちうへてもよし。うふ

るに、根の間しげゝれば花不開。間四寸許たるべし。此花瓶中にさして、久きをたつ事諸花にすぐれたり。色きよく香きよし。寒月花まれなる時、玩賞するにたへたり。○園史に、うるほひてやはらかなる地にうへ、日々に水をそゝげば、花さかなり。地瘦れば花なし。五月竹刀を以て根を分つ。鐵器をおかせば、三年花さかず。六月初ほり出し、風ふく軒下にかけて、七月の末肥土にうふ。瓶にさすには、鹽を入れれば久しくらばます。霜ふりの後、たなをかけて雪霜をおほひ、南に口をひらき日にあつべし。遵生八牋曰、ひとへなるは葉みじかくしてかうばし。愛すべし。盆にうふべし。又曰、ただ鹽のがたにちかければ花しげし。餘法はしるしなし。花史曰、うふるに鐵器をおかせば、長く花をひらかず。

千日紅 三月に種をまくべし。十一月に花ひらく。むらさき色にして花多し。愛すべし。馬糞或魚の

あらひ汁を、ときぐそぐへし。

三波丁子 此種及千日紅、近年異國より來れるにや、むかしはきたらず。九月に花ひらき、十一月まであり。黄色にして愛すべし。又千葉あり、八重やまぶきに似たり。花更によし。こやしは魚のあらひ汁根にそぐべし。六月のはじめ、たねをまくべし。○凡花も葉もわがもとよりみなれ、むかしより人もめでこし、梅、櫻、松、鶏冠木、杉、柳、蘭、菊、牡丹、水仙、蓮などの類よし。異なるるをこのむは、物をもてあそびて、無益のいたづらごとなり。千日紅、三波丁子など、むかしなくて、ちかごろ出たるものなれど、其中にては、賞すべければ、いさゝかこゝにしろす。此外、いまめかしき草木の花、此ごろは、甚おほくいであら、世人の賞する事、さかなれど、いたづかはしければ、しろさず。

十二月

蠟梅^{らうばい}花 此花梅の類にあらずといへども、梅と同時にひらきて、其色蠟の如くなる故、蠟梅の名を得たるよし、からの書にみえたり。葉は茶のごとくにして大なり。花細にして黄なり。花よからずといへども、其香よくして蘭のごとく、古人花をめでてもあそべり。東坡、山谷以下宋儒の詩多し。此花近年唐より來りしにや、いにしへには是ある事をきかず。今も世人あまねくしらず。俗に唐梅といふ二種あり。

迎春花^{おうはい} 臘月、あるひは春の初より、黃花をひらく。故に迎春と名づく。愛すべし。枝ほそく葉こまかなり。其枝土につかざれども、根生ず。いどころなる物なり。枝土に付ば生じやすし。とり木にすべし。させば活やすし。正二月にさすべし。其花繪にかきてまさる物なり。清少納言が枕草紙に、

繪にかきてまざる物をあげたり。其時はいまだ此花來らざりしにや、しるさず。遵生八牋曰、土肥れば、すなはちしげる。獸をにたる水をそくげば花多し。二月中旬わかちうふ。

○百花の外、枝葉實の愛賞すべき物左に記す。

草

蘭草 ふぢばかまとも、らにとも、あらふぎとも、古歌によめり。同じ草なり。野に多し。秋花さく。葉かうばし。○時珍云、二月に宿根より苗を生ず。水邊下温の所に生ず。蘭草、澤蘭一類二種なり。○潜確類書に、蘭は百草の長とす。篤信案、本草綱目、いにしへの所謂蘭草は、いまの世に人の賞翫する花、かうばしき蘭には非ずといへり。和俗に、ふぢばかまといふ物の事なり。此草葉かうばしく、さかへやすし。詩經、易、禮記、楚辭などに蘭といへるはこれなり。

菖蒲 和俗、石菖と云。砂を用ひ、盆にうへて席上の

清玩とす。水をつねにそそぐ。これを机つくへ上にをけ

ば、夜烟をとり、目をやしなふ。水によるし。枯葉

をさるべし。鐵と酒と鹽と糞小便をいむ。尤油を

いむ。又猫の飲たる水あしきよし、園史にみえた

り。海邊の鹽氣ある水を用べからず。根がらみは、

石菖根の土氣をあらひて、多くあつめ、わらび繩

にてかたくからげ、下根を銅刀にてきりそろへ、

盆中に水を入、ひたしおくべし。半年の後かたく

なる。しばし水をかへてよし。○本草曰、臘月

移セバ之尤活やすし。以ニ瓦石器ノ種ヲ之。旦暮易レバ

水ヲ則茂ル。水濁及有ニ泥滓レバ則萎シボム。○瞿仙神隱書

曰、石菖蒲を盆にうへて、机つくへの上におきて、夜間

書をみれば、烟をおさめて、目を害するのうれへな

し。蘇東坡が曰。凡草生ニ石上ニ。須ニ微土ニ以附ニ其

根ニ。惟石菖蒲濯ニ去泥土ヲ。漬スニ以清水ヲ置ニ盆中ニ。可ニ

數十年不ル枯。節葉堅瘦。根鬚連絡。蒼然於

几案間。久更可_レ喜。○篤信云、今端午に用て、家の檐つきにふくさうぶといふ物、是泥菖蒲也。古歌に、あやめふくとよめり。又時珍が説に、石菖蒲をいよくきれば、いよくこまかになる。甚ければ葉の長寸許すんなるを淺蒲せんほといふ。是は石菖蒲をきりて細かにこしらへたるなり。又高麗石菖といふは別に一種なり。甚こまかなる葉なり。園史二曰、別に細葉なるものあり。瓦のくずを用て盆中にうふべし。菖蒲の性土を用ればあらく、石を用ればこまかになる。名花譜曰、性いさぎよさを好、日をおそる。清水を以てやしなふべし。

石葦ひとつば 石上に生ず。さかへやすし。又一種石葦に似て小、葉のうらに星ある草を金星草といふ。本草に出たり。是又うふべし。

石斛 本草曰、五月に苗を生じ、七月花をひらく。十月に實をむすぶ。節の上に根を生ず。おりて砂土にうふれば、つく。或器物にもりてのきの下にかけて、

とき／＼水を漑べし。年を経てもかれず。石の上にもあつまり生ず。

苔 樹下、石上、枯木、瓦の上、すべて濕ある所に生ず。或は山にあるをとりておくも可也。微物なれど、和漢の詩に多く詠ず。暑月には、しば／＼水をそ／＼ぐべし。是又玩賞するにたへたり。又さがり苔といふ物あり。深山の木の枝にさがりて生ず。

景天 べんけいそう 人おほく盆にうへ、或つき山の石間にうふ。西國には、ちごめといふ蟲多し、去べし。

佛甲草 いはれんげ 三種あり。つるあるものあり。葉まるき者あり。葉とがるものあり。

螺麝草 まめつる 石、あるひは枯木にはひ付て生ず。

忍草 しのぶさ 其葉檜に似たり。假山の石間にうふべし。陰地によし。古歌によめり。

貫衆 きしのを 葉の形、そてつに似て其葉あつし。山中石間に生ず。四時しほまず。花なし。假山石間に植べし。

茅藤菓 からたちばな

冬にいたりて、實あかくして愛賞すべし。高さ數寸にすぎず。日かげよし。子をまけば二三年の内に實なる。西國にて、やぶからしといふ。花史曰、葉は竹に似て、實は枝頭に生ず。あかき事朱のごとし。久しきをへてをちず。雪霜にもいたまず。梅雨の中に花ひらく。また遵生八牋に出たるは、是にことなり。

麥門冬 ばくもんどう

大小二種あり。大小ともにむらさき花を開、ひらき其實紺黒にして小粒なり。大葉は其葉蘭のごとく、

又觀音草の葉に似たり。林中に多し。おほ小葉はせう

がひげといふ。又、うのひげともいふ。くすりには大小ともに用ゆ。やはらかなる肥地にうふれば、其根大なり。小便をそぐべし。小葉麥門、冬は花圃のまはりに植て、うねのかざりとすべし。月令廣義曰、黒土と黃砂によろし。肥土によし。毎年六月、九月、十二月、糞をおく。水をそぐ草をさるべし。

吉祥草 しやう

和俗、觀音草といふ。葉の形大葉の麥門に似

て葉うすく、少廣し。花なし。一説、園史曰、九月に小花をひらく。濕を好む。やき物の盆にうふべし。水を常にそとげばうるはし。みだりに平地にうふれば、見事ならず。

珊瑚せんりやう

山林に生ず。葉は橘に似て、莖一かぶより多く生ず。節あり。秋の末冬に至りて、實あかくして愛すべし。陰地を好む。樹蔭こかげによろし。日にあたれば不さかへ榮。あるひは盆にうへ屋下におきて玩ぶべし。園史曰、珊瑚、葉つばきのごとくにて小なり。夏白花をひらく。秋紅實をむすぶ。珊瑚のごとし。疊々るいとして愛すべし。二三月にわかし植べし。

細辛 賀茂葵是なり。世に細辛といふは杜衡とくかう也。も

ろこしにても、とりちがひて、あやまるよし、本草に見えたり。山城賀茂に多し、外州にうつしうふるに、所により土地宜しからざれば枯る。陰地を好む。赤土と砂とませて、北の屋かげ濕ある所にうふべし。日にあへばいたむ。六月に葉かるゝ

を、まことに枯たりと思ふべからず。いなかに移して、此うへやうを知らずしてかるゝにや。

萬年青^{おもど} 三才圖繪曰、葉似^ニ芭蕉^ニ。隆冬不^レ衰。以^ニ其

多^ヲ壽故名^ニく。○園史曰、春秋二分にわかちうふべし。又瓦盆にうふべし。肥土をこのむ。冷茶をそぐべし。○篤信云、和俗に、あやまりておもとを以藜蘆とす。藥屋是をうる。是に非ず。冬春舊葉をかりすてよし。葉も實も愛すべし。實は紅なり。やはらかなる肥土にうふれば、葉うるはし。

百部^{きじがへし} 葉は茴香に似たり。高一二尺ばかり。一窠^{かぶ}におほく叢生^{あつまつり}す。あかき實あり。賞すべし。又實なきあり。さうちくといふ。

霸王樹^{いろうへろ} 花史と遵生八牋に出たり。其形はだへ胡瓜^{きうり}に似てひらし。葉なし。色青くして、點子^{ほし}多し。

頂上^{ちやう}より小さな葉生ずる事あり。高さ二三尺にいたる。おりてさせば生ず。草中の奇物也。甚寒氣におそる。冬覆^{おほひ}をせざればくさる。西國にて是を

たうなつと云。油の物にしみたるをよくすいこる。

竹 竹の類おほし。あげてかぞへがたし。臘月に植

べし。又五月に筍生じたる時、根をほりて植れば

活やすし。五月十三日を竹醉日といふ。此日竹を

植れば活やすし。時にあらずして植れば多くはか

る。晋の戴凱之が竹の譜に、草に非ず木にあらずと

かけり。古今集にのせたる桓武の御女、高津内親

王の歌に、木にもあらず草にもあらず竹のよのは

しに我身はなりぬべらなり。とよめるは、よく是

に叶へり。されど山海經さんかいきやうじ、爾雅說文がせつもんなごいふ書に、

皆竹を以て草とせり。藥には淡竹はちくを用ゆ。唐竹と

て、一所にあつまり生じて、ちらざるあり。人うへ

て玩とす。是時珍がいほゆる義竹なるべし。又天寶

遺事に出たり。齊民要術に曰、竹は高平の地によろ

し。水をうれば則かる。黄白にして柔やはらかなる土よし。

正二月のうち、ほりて葉をさりてうふべし。土をお

ほふ事厚さ五寸ばかり、稻麥のぬかをこやしとす。

水を澆そいぐべからず。植るとき梢をきり去り、竹木を立て是をたすけ、根をうごかしむることなかれ。或曰、末をきるべからず。只上下兩所架たなをなしてよし。そへ竹を上下兩所にゆい付、風にうごかざるやうにすべし。沙地にもよし。雨後に植べし。西風にあたればあしう。種樹書曰、或二三本をひとつにかため植べし。又曰、竹をうふるには土を二三尺高くすべし。水に損せず。居家必用曰、竹を植るに時なし。只連陰のうち是を植れば、則活る。凡竹の類多し。戴凱之が竹の譜、竹の別類六十一ありと云り。日本にも淡竹はちく、苦竹、女竹、篠竹しの、矢筈竹やの、蕩竹だいまやう、雪竹かんちく、鳳尾竹くわんおんちく、無節竹むせう、斑竹まだらふ、紫竹しちく。孟宗竹。金竹など。此外にも猶多し。五雜俎曰、竹甚しげくば間をきるべし。然ざれば、みなりて枯る。凡竹に實のなるは人の疫癘いきれいのごとし。花ひらかば急に切て、只其根を留むべし。明年に必生ず。しからざれば必枯る。○鶴林玉露に、竹は旬

日の間に生長して空をおかし、雲に入。これ草木靈
異の尤けやけきもの也といへり。王子猷ゆうは是を愛して、
何ぞ一日も此君なかるべきと云。杜子美が詩に、
平生憇げいそくの息地。必ス種フ數竿竹フ。梅聖俞カ詩にも、買バ
山須ヲ買フ泉ヲ。種ハ樹須ヲ種フ竹ヲ。東坡カリよくいんけん綠筠軒の詩に、
可レ使ニ食有フ肉ヲ。不レ可ニ居無ル竹ヲ。無レ肉令ニ人瘦フ。
無レ竹令ニ人俗フ。といへり。張薦は竹中に屋をつく
り、つねに其中に居をれり。竹は古人も甚賞せり。尤
愛すべきもの也。又史記に、渭川いせん千畝竹。主人千戶こ
侯ことひとし、といへるは、おほく植て其利ある事を
いへり。

簕ねざい くまざさ。あたござさなどいふ類也。葉は竹葉
の如くにして廣し。くさは竹に似て小さにしてみ
じかし。四時常に青し。裏うらの色は表よりうすし。
其葉を取て粽ちまきをつむ。庭或假山つぎに植べし。

芭蕉 草中のいと大なるもの也。廣庭にうふべし。
春の末に葉を生ず。秋にいたりてやむ。卷葉ひら

けてのぶれば、又新卷あとより生ず。張子厚芭蕉の詩、吟玩すべし。其根くき常にありて、年を経て大也。毎年根より子を生ず。花さく事まれ也。花黄なり。和俗これを優曇花うとんげといふよし、東鑑にみえたり。

錦荔枝つるれいし 三月に種をうふ。苗生じて後うつしうふ。

或盆にうへ、長じてかつらとなる時、ませをつくり、籠かごの如くにして花をはくしむ。秋にいたり瓜のごとくなる。實み熟して其色金のごとく、其皮さけて、なかご紅なり。佳觀かかんとすべし。苦瓜くくわとも云。

蕃椒たうがらし 文祿年中秀吉公の朝鮮をうち給ひし時、彼地

より種を持來て、はじめて日本に植る故に、かうらい胡椒ともいふ。又西國にて南蠻胡椒と稱す。近年其形品々替る者多く出、其實あかくして賞するにたへたり。盆にうへてよし。○二月に肥地に種をまき、長じて後うつしうふべし。ときん、糞水をそぐべし。實に大小あり。上にむかふあり。

是をよしとす。下にむかふあり。丸くして小さな
るあり。實一所に多くあつまり生ずるあり。柿かきの
ごとくなるあり。李時珍、食物本草に、蕃椒をのせ
たり。曰、人盆中にうへて以玩好ぐわんこうとす。温無ニム毒。
主ドル消シ宿食ヲ解キ結氣ヲ開ヲ胃口ヲ辟ヲ邪惡ヲ殺ヲ中腥氣
訞毒ヲ。又遵生八牋等、近世の書に出いでたり。本草綱
目にはのせず。

芒すいぎ 花すくき、あるひは尾花とも云。古歌によめり。
又絲すくきあり。尤賞すべし。庭にうふべし。

知風草かぜくさ 又ちから草といふ。地筋かやに似たり。山野所
所にあり。其莖くさに節の有無を見て、其年の颶風おほかせの
有無をうらなふ。一節あれば一たび風ふく。二あ
れば二度ふく。もとにあれば春大風ふく。次は夏、
其次は秋ふく。末にあれば冬大風ふく。其節は人
の指の横紋の如し。焦氏か類林、大明一統志、及廣志
にみえたり。

濱木綿はまきふ 葉は芭蕉はまきににて小く、厚くして堅うみばたし。海濱

に生ず。葉の本幾重にもかさなれり。故に萬葉第
四卷柿本人丸の歌に、みくまのうらののはまゆふ
百重ももゑなる、心はおもへご只にあはぬかな、葉のかさ
なれる事を、百重なるこよめり。いにしへは、大饗きやう
のとき、鳥の足つかむ料れうに、伊勢國みくまのゝ濱ゆ
ふをめすといふ。童蒙抄に曰、此三熊野は伊勢の
國にあり。一説志摩國にありと云。紀伊國熊野に
はあらず。

木賊どくさ 草の色みざりにして、目をよろこばしめ、觀
賞すべし。やはらかにして細なる地にうへ、水を
しばしそぐべし。正月に舊莖をみなきるべし。
新莖生じてうるはし。○本草に、四月にとる。又曰、
とるに時なし。

雁來紅こしちくさ 鷄冠花けいとうがの類也。花なし。其葉九月に紅にし
て、花の如し。故に鴈來紅と名く。又六月に葉紅な
るをば、十樣錦やうきんといふ。二月に實をまく。沼水をそ
ぐべし。

蓴ぬなば 蓴菜じゆんさいなり。

古歌にぬなはとよめり。池に生じ、葉水面に浮ぶ。葉の形蓮はすに似て圓く、少長く小也。くさ少にして、氷こほりのごとくなる物を帶おびたり。ゆびきて食とす。是張翰かんが好し所にして、もろこしの人賞せり。本草其外諸書に出たり。

荇あこい 是又水くさにして、其葉水面に浮ぶ事蓴如し。

葉も又蓴に似てまぎれやすし。荇と蓴と一類二種也。蓴も荇も葉の長さ二三寸に過ず。共に夏月黃花をひらく。又睡蓮有。其花蓮花に似たり。蓴は其葉蓮に似てまるく、さけたる所なく、荇は葉のうち一所さけたる所あり。少とがりて長し。是を以てわかちとす。花のくさは氷のごとくなる物なり。

花も古歌に讀り。詩に參差荇菜シンサタルと作れる是也。蓴

荇二物、其花みるに足らずといへども、經傳にのせ古人の詠吟にありて、其名いちじるしく、其葉も又愛すべければ、池中にうへて雅趣がしゆを助くべし。

浮萍 是又池上の佳趣をたすけて、愛賞すべし。和

漢の吟詠すくなからず。

酸漿^{はうづき} 又金灯笼と云。此草螫^{はう}と云蟲このんで葉をくらふ。故にほうづきといふにや。其實熟する時あかくしてみつべし。女兒其なかごをさりて、好んで口中にふくみならず。或ふきあげて、たはむれとす。

萬年松^{まんねんくさ} 小き草なり。衡嶽^{かうかく}志曰、深山の石崖^{がい}に生ず。其葉松に似たり。高さ三四寸ばかり、冬もしほまず。根共にほりて箱のうちにやさめ置て、數十年を経て取出して地にうふれば、青くさかふる事もどのごとし。又ほりて箱におさめ、ふたたび歲月を経てうふれば、又もどのごとし。玉栢ともいふ。

木

松 松は百木の長也。衆木にすぐれて千年のよはひを保ち、霜雪をおかして四時常に緑なり。歲寒の操^{みさは}ありて、君子の徳に比せり。いにしへより、から

やまと共に賞する事かららず。又梁りやう たうこうけいの陶弘景は、

松風を愛して庭院皆松をうへて、常に其響いひやうをさう

てたのしみをなせり。松かせのをとは、いとあはれ
にきこゆる物にこそ、詩歌にも多く吟じ侍りけれ。

松の種類多し。女松男松あり。五粒松は和俗五葉

と云。海松からまつは實あり。菓とすべし。朝鮮より其實

わたる故、和俗から松と稱す。され共日本にも信

濃戸隱山などに、いにしへよりこれあり。松を植

るは、春社の前土と共にうへ土かふべし。生ぜずと

いふ事なし。此外生じ難し。農桑通訣にいはく、

松をさすには、二月の中の前後五日新枝をきり、穴

をほり枝をいれ、土を入れて、きびしくつき堅む。く

もりたる時にさすべし。雨に逢へば必生ず。雨な

ければ、生ずる事數すくなし。種樹書にいはく、松

を植るには、大根ナルを切去て、只まはりのひげねをと

ごむれば生ず。春分の後植る事なかれ。秋分の後

植べし。根を堅くすべし。動かすことなかれ。○

蹇驢嘶餘曰、五葉松并諸木の朽目に付る膏藥の

方、干鮭からさけの粉を赤土にて粘ねばして付て、上をおもと

の葉にて包べし。おもとは精力つよくて、うるおひ

久しくたもつもの也。又松にしろゑといふ蟲の付
たる藥、韭にらをもみて其汁をかくべし。又硫黃を粉
にしてひねりかくる妙也。仙翁花諸草木にもよし。

○長松をほる法、正月の末二月のはじめ、山にあ
る枝少長松すくなきの根を、盤まはりをひろくつけず少のこし、

其外を廣くほりて土をあげ、ほりたる其内はひげを
きらず、其外の根はひとしくきりすて、根盤ねまはりを

こもにつくみ、繩にて幾筋もよこたてにからげ、

日のあたらず、土のをちざるやうにして、山より植
る所まで下に置ず、直すぐに持來るべし。うごかさず

して、すぐに速にうふ。うへて後、竹木をたて、所

所ゆひ付、風にうごかさしむべからず。時々水を

そぐべし。うへたる年の暑月に、水をしばくそ
そぐべし。かやうにすれば必活く。松をうふるに

は、春後社前にはるべしと種樹書にみえたり。松を植るに雨をみかけてうふべし。雨前にうふれば活やすし。春分の前、秋分の後、土をおび雨に先だつてうふれば多くは活く。○盆松をやしなふ法、春めだちを折る時節は、松の芽出るとき、みごりの本一分程おき折てつむべし。後に生る芽をそだつべし。夏のはげしき日にあつべからず。秋の頃葉のびたるは、葉をつみさるべし。冬寒き時は、毎日少水をかくる。されども雪雨ふるときは、土のしめりあるゆへ、二日三日にも水をそぐべし。春夏は四日五日にそぐ。あまり水すぐればいたむ。少つつそぐべし。葉に青く小き蟲つきやすし。心がけてこれをとるべし。○凡しげれる松の下なる木はいたむ。

^{かしは}栢^{かしは} かえの木は古歌にもよめり。栢の類多し、側栢^{そくはく}を^こ兒の手かしはといふ。萬葉の歌によめるごとく、ふたおもてあり。實も葉も藥となる。其木葉のか

たち賞すべし。

檜ひのき 農桑要訣にいはく、檜をさす事、二三月芽めのいでんとするとき、先赤土をよくくだき、水をかけ、間をおきて水をそそぎ、檜の枝小指のごとくなるを、長さ一尺五寸ばかりにきりて、馬の耳の形にそそぎ、先小枝を以、土をさして穴をなし、其あとに枝をさすべし。高さ五六寸以上なるべし、しばし水をそそぎ、上は日おほひをすべし。來春うつし植る事、松をうふるがごとくすべし。

圓栢いんぱく 正月にさすべし。

落葉松ふじまつ 松に似て葉細にしげくして針のごとく、其葉霜後にことごとくおつ、冬は葉なし。信濃に多し。○衡嶽志かうがくしに出たり。

羅漢松まはんまつ 順和名抄に栢ひをまきと訓す。犬まきあり、高野まきあり。高野まき尤よし。園中にうへて雅趣がしゆをたすく。實をちて自よく生ず。又正月にさすべし。

樅^{ちりみ}

羅漢松に似て葉みじかし。其木すぐなり、喬木^{けうもく}なり。庭にうへて玩ぶべし。牆^{かき}のほとりに植て外よりみるもよし。凡かうやうの木を、宅のまはり^{さう}にうへめぐらしたるは、にぎしく富貴の相あるもの也。正月に枝をさすべし。

柏子^{びやくし}

其葉杉に似て細なり。一種地にはふあり、長く延蔓^{えんまん}す。好事^{かうす}の者枝をかづめて、龍虎獅子などの形に作る。故にすぐなるを立柏子と云、はふを^{かや}はひ柏子と云。

樅^{かや}

實をうふるに、熟して大なるを、肉と共にうへ、二三年の後うつしうふべし。其實は吉野に産するを上品とす。凡實の長さどまるきとあり。丸きは近江の朽木谷に有。又かやの類にひぶと云物あり。實^みに油多し。食すべからず。葉も實もかやに似たり。又きやらばくといふ物あり。其葉かやに似たり。

賢木^{さかき}

神事に用る木なる故に、古歌にも多くよめり。

又龍眼木ともかけり。園にうへて是をみしるべし。

寶基本紀曰、榲一名眞賢木、持_ニ受自然之正氣_一、
冬夏常青_ニ。故衆木中以_ニ賢木_一號_レ榲也。

佐和羅木 是檜栢の類也。正月にさすべし。

杉 赤土によろし。杉の種類多し。鬼杉尤下品也。筑

紫香推宮に綾杉あり、古歌によめり。其葉相まじ
はりてあやの紋のごとし。他所にはまれなり。京

都北山の龍安寺及山科勸修寺にあり。○およそ杉
は實をうへ、或さし木にすべし。木の直なる事、

さし木は實うへのよきにはしかず。○杉の枝をさ

す法、正月枝の梢を用ひて牛馬耳のごとく、十枝

を一把にからげ合せ、かねて土俵をこしらへ、三

方に數百莖さし、池水に俵をひたしおく事卅日、

枝は水にひたさずして後白根生る時とり出し、溝
をなして横にうふ。是風にあたらざる故によく有

付也。自然に上に生長す。○一法、正月陰地の少し
めりたる所にさすべし。赤土のやはらかにねばき

がよし。別の枝にて穴をつきてさすべし。陰地な
くば甘おほひをすべし。じばく水をそぐべし。
唐杉 又ひめ杉といふ。杉より葉はそくこまかなり。
葉おほくじげる。或まがきとすによし。正月に
ひかげにさすべし。活やすし。赤土黒土によろし。

楊柳 柳の類又多し。しだれ柳尤よし。やまともろ
こし、共に古今の人めでもてあそぶ事かぎりなく、
詩歌にも多く詠せり。園中に必うへて、雅興をた
すくべし。春の初新芽めの生ずるいとうるはし。楊
柳の風、楊柳の月、詩人殊吟賞す。いと柳、柳の
いと、歌人も又詠ず。させばはやく長ず。さしや
う、正月わかき楊柳の枝の大きき笛竹ほごなるを、
長一尺五寸ばかりに切、本を火にて少やき、肥た
る濕地に少かたふけて、上の少あらはるゝ程にふ
かくうづみ、まはりを踏つけて、地かはかば時々
水を懸べし。一本より枝おほく生出る内にて、大
にしてすなほ成を一本残し、其餘はみな切去べし。

すぐなるつよき竹を一本、其側^{かは}に動^{うご}ざるやうにふかく立、繩にて所々柳にゆひ付置べし。一年の中に長じて一丈斗になる。かたはらより出る枝をばつみて、一株をすぐに高く長せしむべし。

鳳尾蕉^{そてつ} 夏至の比芽^めを出す。此木からにも琉球より

出るよし。月令廣義にしるせり。日本にも琉球より来る。南方の暖なる地によるし。北國又は山中には活^つず。寒をおそるゝ故也。甚寒き年は、葉をことごとく切て、こもにてよくおほふべし。根をきらずして、根まはりをはりて、糞を埋み、或すすかや、くさりわら、かまごの焼土などをうづめば、榮へしげる。又しばしば小便をそぐべし。濕をいむ。高き所にうふべし。鐵と火とをこのむ。寒濕にいたみてくさりたる所をば火にてやき、鐵の針を打べし。或根をはり出して日にほし、遠所にうつしてもよく生ず。子出来たらば數年の後、子に根多く生じたる時、分ち植べし。根すくなき

時、わけては枯やすし。毎年古葉を切て去、くきの本を五寸ばかり残すべし。又番りうきうそくつ蕉とて少きにして枝多きあり。尤愛玩すべし。是をうふれば火災をさくるよし、五雜俎にみえたり。又五雜俎曰、かれんとするには、鐵の屑を以、こゑとす。鐵の釘をうては活く。又曰、三十年の内に兩度花さくを見る、花は芭蕉に似て色黄なり。實ならずといへり。こへをよくすれば、一年に二度芽を生ず。臘月には根のまはりに糞をおけば榮茂す。風のはげしき所に植べからず。上に雪たまれば來年いたむ。上にわら圓座、又はふごを作りかぶせおき、春あたたかになりて是をさるべし。寒風にあへば、くさりかるゝ事あり。寒濕にあひ、根のくさりたるは、骨肉のあらはるゝほごけづりて、植れば活く。泉州境の祥雲寺に大そてつ數株あり。妙國寺にも大そてつあり。いづれも世上にたぐひなし。

梭欄しゅうらん 古歌に、すろの木とよめり。六七月黄白花を

開き、八九月實をむすぶ。一年に二三度必皮をはぎとるべし。しからざれば木かるゝ。或長せず。

便民圖曰、二月の間種をまき、長一尺ばかりの時、うつしうへて行^{つら}をなし、四尺餘に至りて始て皮をはぐべし。毎年四季是をはぐ。或一年に二度はぐもよし。其皮なはになへば、水に入て千年くさらず。又皮をはふきとすべし、其葉もはふきとす。皮をはぐに、葉の本の高き所よりはげば、皮にきずなし。

欒^{しゅうろ}竹 葉はしゅうろに似、くきは竹に似たり。風寒を恐^{おそ}る。南庭に植べし。杖にしてよし。冬はおほひをすべし。

機樹^{かへで} 順和名抄には、鷄冠木をかへでと訓じ、又かへるての木とす。其葉かへるの手に似たる故に名づけり。楓樹はからの書を考みるに、是にことなり。山中にあるは、秋の末冬にいたりて、霜に逢て、紅妝^{さう}甚愛玩すべし。山とをき里にあるはしか

らず。高雄山の機樹は他州にある者と、其たね同じからず。京都の東山、貴布禰、高雄、牧の尾、梅尾、笠取山にある機樹の紅葉は、すべてよろづの花にもまされり。凡かへでの種類多し。又八鹽、野村、猩々、席もみぢ、せいがいなどの異類多し。龍田の紅葉は、必機樹かへぎにかざるべからず。萬木のもみぢなるべし。龍田に機樹は今多からず。ひるの山に機樹はすくなくして、他木の紅葉多し。吉野山には、秋冬櫻の紅葉多くして、春の花にをこらす。尤みるにたえたり。

冬青樹あをき 三種あり。一種は、其木青して、高さ一丈に過ず、葉大にして厚し。四月に青白花をひらく。實は棗に似て小さなり。冬にいたりて赤し。みるに堪たり。其實二月迄あり、つぐみ、ひよごり、好んではむ。萬年枝共云。此事李時珍が食物本草にみえたり。庭にうへて賞玩すべし。其木の枝象牙さうげに似たり。其葉四時共に青し。櫛の字を、日本紀に

も、順和名抄にも、あを木と訓す。字書に櫛の字を萬年枝なりと注せり。よく叶へり。○一種なみと云木あり。葉はねずみもちのごとくにして、みあかし。とりもちと一類別種なり。其葉も實も又みるに堪たり。○一種ねずみもちをも冬青といふ。衛矛^{にしき} 其葉冬にいたり紅にして見つべし。故にしき木と名づく。庭中、日あてよき所に植べし。其枝は箭の羽のごとし。故に異名を鬼箭と云。其枝を煎じのめば、能心痛の甚きをいやす妙藥なり。本草にしるさず。

梧桐^{あをぎり} 和俗あをきりと云。これまことの桐也。詩人の詠多し、和歌も又すくなからず。尤佳木也。庭にうへて愛すべし。實うへにすべし。早く長ず。皮青して、肌^{はだ}なめらかなり。其木節なくして直也。きめ細かにして性堅し。琴に作るべし。良材なり。其實は胡椒の大なる程あり。醫書に丸藥の大さを、梧桐子の大きさのごとくといへるは是なり。又白桐

あり。是世俗のきりと云て、板にする木也。荏桐はあぶら桐なり。大桐といふ物あり。何れも木のうるはしき事、梧桐にはをとれり。

梓あしな 葉は桐に似て、實は豇豆さいげのごとくながし。埤雅云、梓は百木の長とす。故に木王といふ。羅願か云、家に此木あばれ、餘材皆雷の爲にうたれずといへり。此故にや和俗此木を園にうふれば、雷をちすといふ。

黄楊木うわげ 人家多く是を植ふ、愛賞すべし。されども蟲多しばく取ざれば、葉さかへず。或盆に植ふ。五月には葉變じて、黄ばみ色かはる。枯るゝにはあらず。大なる木は櫛に作る。古歌にもつげのくしをよめり。つげの類多し。尾張つげ、柞木いぬつげなどあり。

椎 赤土黒土によろし。庭にうふるもよし。此木本草にのせず。閩書府志などにのせたり。實み長し。まゐるきもあり。しいとは音を以て訓ずるなり。

梅茂むめもとき登岐

五月に細花を開く。秋冬に至て實み赤くなる。庭にうへて玩賞するに堪たり。赤土肥土に宜よろし。砂土によるしからず。若實ならずんば糞を根まわりにおほくおくべし。必實のる。京都及畿内にあるは實おほし。人家所々庭にうふ。

椿ちん

香椿とも云。近年もろこしよりわたる。葉も木も漆に似たり。日本にあやまりてつばきとよめり。根のかたはらに小木多く生ず、二八月にわかち植べし。莊子の大椿八千歳を以て。春秋とすといへるは、是なり。

木國 此樹人このんで庭にうふ。其葉四時緑なり。

橙だい

實熟して紅なる時、觀賞するにたえたり。和俗

に久みのらざるば、枝の末を多くきりて、別の橙子をさしはさみ置は、其年必なると云。又みのらざるに臘月しはす根まはりに、人糞馬糞をとほくおきて、土をあつくかふべし。橘みかん、柑かんの類もみなしかり。糞をおく時、根土をさるに、とがりたる棒或つる

のはしにてあさくほるべし。必いましめて、鋤にて細根を切べからず。

金橘 きんかん

ひめたちばなと云。みかんなどにをくれ、六

月中の後花さく。實なる年又おそし。臘月 しはすに至て

熟 じゆくす。其實の色かたち愛賞すべし。此木根こまや

かなり。うつす時、根多くきるれば必枯る。樹 すこし少

きなる時、根盤 まはりの土ともにうつすべし。大なれば、

根盤 まはりの土をちやすくして、うつせば必かる。うつ

すべからず。樹下陰地によるしからず。臘月根盤 まはり

に糞を置べし。寒をおそる。

多羅葉 葉は木犀 せいに似て大なり。實なりて秋熟す色

あかし。

枸杞 くこ から、やまと、二種あり、からをよこす。

うへてまがきとす。其實秋冬にいたりて、紅にし

て愛すべし。藥葉として、精氣をおぎなひ、目を

あきらかにす。其葉茹 ゆひきとなして味よし、ほしても

食す。又わかき時よりあぶりて藥とすべし。正月

に、枝をきりて、日あてにさすべし。韭にらをかるがごとく、時々かりて取るべし。葉に蟲多おほし。時々是を取去べし。其根の皮を地骨皮と云。○園史曰、事をこのむ者、盆にうへて賞翫とす。其實赤くして、みごとなるゆへなり。○居家必用云、畦中けいちうに子をうふること、菜をうふるが如く、糞と水とをそぐ、其年瘦れども三年以後肥る。莖苗くまなへの長せざる内に、はやくさるべし。かくのごとくすれば、春より秋まで、其苗たえず。又莖を四五寸に切て、しげく肥地にさし置べし。苗生じて、韭をきる法のごとくにして取べし。日中及雨中にさるべからず。晴たる日早晨しんに切べし。○種樹書曰、子と根を肥地にうへ、苗長じて、剪きりて食す。農政全書曰、其葉くらふべく、其實と根と藥とすべし。正八九月にさす。

讓葉ゆづりは 和書に杠の字をかく、其出處おぼつかなし。春まで、去年のふる葉をちらずして、ことしのわか

葉皆おひとくのほりて後、ふる葉をつる故、ゆづり葉とは名付けられし。莖あかく葉うるはし。庭に植て愛し見るべし。倭俗、是を正月に用ひ、こどぶきを祝ふ。古歌にもよめり。

やまたはな
平地木

古歌にも詠せり。藻鱗草にみえたり。畫譜

に曰、高さ不_レ盈_ニ尺_ニ、葉深緑子紅_{みくれないはなはだ}甚_{クハ}し。多在_ニ

巖_{がん}壑_く幽處_ニ、又遵生八牋に見えたり。根に糞をおき、

小便をそくげば肥大なり。○平地木は、萬木の内にて、いとちいさき木なり。夫松は高さ事白尺。此

木はひきゝ事數寸にすぎず。凡物各むまれつきたる分限あり。長きものはしりぞくべからず。みじかきものはすゝむべからず。人も又かくのごとし。

貧賤なるも、富貴なるも、皆生れ付たる分限にて、天の命する所なれば、其分内をやすんじ、たのしみて分外をねがふべからず。もし富貴なるは、貧賤をゐなごりてめぐまず。貧賤なるは富貴をうらやみて、へつらひもどめば、是天命にそむきて、

天の罪人なるべし。其はては、貧賤はいよくく
るしみ、富貴はくつがへりて、其分限をたもつこ
とあたはず。天道はまことにおそるべし。人をめ
ぐむは、たとへば草木を愛するがごとくすべし。
其きらふ事はさけて、このむ事はあたふべし。かく
のごとくならざれば、草木いたみてそたふす。人
も又かくのごとし、あに人を愛する事、草木にだ
もしかざらめやは。

花譜卷之下 終